

全国歴史教育研究協議会第 65 回研究大会(埼玉大会)

—大会テーマ「歴史教育における探究とは何か」—

神奈川総合産業高校 高橋 俊介

はじめに

全歴研の第 65 回研究大会(埼玉大会)が 2024 年 7 月 25 日(木)～27 日(土)の 3 日間で開催された。JR 浦和駅徒歩 1 分の浦和コミュニティーセンターを会場とする今大会は、前年の東京大会に引き続いて、ハイブリッド形式で実施された。私は初任の年に開催された第 54 回神奈川大会にたまたまスタッフとして参加していたが、実際に参加するようになった直近 2 回はオンライン参加であった。今回は 2 日間であるが初めて会場参加することができ、全国から 200 名以上が集まる会場の熱気に大きな刺激をいただいた。

歴史教育における探究とは

大会テーマは「歴史教育における探究とは何か」で、初日は午前には総会と午後には第 2～5 分科会が行われた。各分科会のテーマとしては、第 2 分科会は「歴史総合における授業展開」、第 3 分科会は「日本史探究における授業展開」、第 4 分科会は「世界史探究における授業展開」、第 5 分科会は「地域との連携による探究的な学び～小中高で深めるおがわ学の試み～」であった。私の関心事の一つに「歴史総合」から「日本史探究」への接続について関心事であったこともあり、第 3 分科会に参加した。

第 3 分科会では、杉本祐輝氏(県立深谷高校)の日本史探究における「時代を通観する問い」と「仮説」を表現させた授業実践の報告が印象に残っている。生徒に「問い」よりも「仮説」を表現させる難しさが滲んだ報告であった。また、堀越直樹氏(昌平学園)の教科書を中心に据えて時代の特徴と展開を考察させる実践は、生徒の持つ可能性にも大変驚かされたが、それを最大限引き出そうとする示唆に富んだ実践であった。なお、第 2 分科会では神奈川県から日本史研究推進委員でもある渡邊泰斗氏(横浜国際)が「歴史総合の授業実践 生徒が歴史を読み解き、考え、書く」を報告された。

2 日目は午前には第 1 分科会のシンポジウム、午後には記念講演が行われた。シンポジウムのテーマは「歴史教育における“探究”とは何か」で、“探究”に対するさまざまなあり方や今後の方向性と評価について議論がなされ、大きなヒントを得ることができた。

記念講演では土屋武志先生(愛知教育大学名誉教授)が登壇され、「高校で歴史学習がなぜ必要か? —解釈型歴史学習の新たな役割—」と題してご講演された。「解釈型歴史学習」の提唱者でもある土屋先生のお話はこれからの歴史学習に光を照らす内容であった。

また、3 日目は残念ながら参加できなかったが、「鉄道 150 年その後と新紙幣の顔 渋沢栄一を訪ねて」というテーマで、鉄道博物館や渋沢栄一関係史跡を巡ったようである。

おわりに

全歴研の第 66 回研究大会となる高知大会は、2025 年の 7 月 31 日(木)～8 月 2 日(土)にかけて「新しい歴史教育の取り組みと展望」というテーマで開催される予定だ。その後は第 67 回千葉大会、第 68 回佐賀大会、第 70 回東京大会と続く。この神奈川でも第 69 回大会の開催地として、2013 年の第 54 回大会以来となる開催を目指している。

最後に、本大会の運営・報告に携わった埼玉県の先生方には感謝を申し上げます。